

# 私達が帰つていく場所

——「トルソーの時代」・「浅茅が宿」・地域の古典を読む——

小山 秀樹

一 授業の動機、あるいは「帰っていく」のは誰か。

午後の授業。教室の外、ビルの向こうの曇った空を見る。あるいは放課後、グラウンドいっぱいにはクラブ活動する生徒達を見るとき、突然のように私はこのような感覚に襲われる。「私は本当に遠くまで来てしまった。」長い通勤時間のせいからとも、帰るべき場所の喪失からとも思われるこの感覚と私は少しずつ慣れ親しんで来た。しかしそうした私を驚かせるのは、本校の生徒にとつてもこの感覚が非常に身近なものとして在るに違いないという発見である。つまり、「生徒達は本当に遠くまで来てしまっている。」

物理的な側面だけを取りあげてみても、一時間三十分の本校の通学範囲は、奈良はおろか京都、和歌山からの通学も可能にしている。このような広い範囲から生徒達が毎日一つの教室に集まり、授業を受け、クラス活動やクラブ活動に励み、またそれぞれの場所に帰宅しているというのは考えてみれば全く奇跡に近いことなのである。そして物理

的に「遠くまで来てしまっている」ことは必然として多感な生徒達の成長過程で内面的な意識のさわりを生んでいく。文字通り、彼らは地元を時間を持たない人達である。それも高校三年間だけではない。六年、あるいは十二年も地域に守られることのない形で学習の場を持っている。彼らは自分達の地元、地域についてどのような感覚を持っているのだろうか。また、その場所は彼らにとつてどんな種類の場所なのだろうか。

「彼らはいつたい、どこへ帰っていくのだろうか？」とかく「帰らなければならぬ」と私は考えた。まず、地元、地域へ。そして明日への気力が今日も満たされるであろう場所へ。「遠くまで来てしまった。」と私は感じる。しかし何年も私以上に「遠くまで来てしまっている」に違いない生徒達がこうして私の目の前にいて、毎日私と接している。私は、私と生徒達が帰っていけるような、そんな授業をしたいと考えた。

## 二 どこへ「帰っていくか」という問題。

「帰らなければならない」と私は考えたわけだが、はたしてこのとき「帰る」という言葉を私はどのようにイメージしたのだろうか。あるいは、どこへ帰らなければならないかと私は考えたのだろうか。「帰る」という言葉を考えていくと次の二とおりのイメージが思い起こされる。

a 生きる場である地元、地域を実感し、自分自身の根拠となる場所として自覚していく。

b 自分自身が落ち着くことができたり、エネルギーを充填できたりする場所を求めていく。

a b を求めていくことは、そのまま国語科の授業の目標として設定できるように私には思われる。古典の授業ではこれらはどのような展開が想定されるだろうか。留意しなければならぬ点とともに次にあげてみたいと思う。

a では、地元、地域に関連した古典を生徒達が探し求めていくという課題が可能であると思われる。最近では各自治体等がそれぞれ地元ゆかりの古典をPRの一つとして用いていたりして、比較的多くの地域で古典文学が見つかることになるかもしれない。しかし、地域の名称（たとえば生駒、八尾）にちなんだ作品を見つけた後、自分の内面とどう重ねあわせて自分自身の根拠としていくのかという困難は生じるであろう。「私の地域にも古典があった」以上の実感をはたして授業で生徒に持たせることができる

だろうか。

b では古典文学に登場する人物の行動や心情を「帰る」という観点から重ねあわせ、自分自身の問題としてとらえなおしていくということが考えられる。しかしこの場合は「帰る」意味が限りなく広がっていくことは避けられないように思われる。また、a b は関連させることができるのだろうか。どのような教材をどう展開させるのか。多くの問題をかかえ、寄り道もしながら授業の実際はおよそ次のようになっていった。

## 三 生徒達はどのように学習してきたか。

次の三つを目標として設定した。

① 自分自身と重ねて古典文学を読んでいく態度を身につけさせる。

② 「帰っていく場所」という問題意識を持ちながら古典文学を読み進めていくことにより、自分自身を深く見つめさせる。

③ 「伊勢物語」「史記」「浅茅が宿」を読み取り、鑑賞する力を養わせる。

まず、課題として自分の地元へ帰って古典文学を採す課題を与えた。夏休み前のことである。六年、あるいは十二年も地域と無関係な形で学習の場を持っているほとんどの生徒達をまず地域へと帰したかったのである。生徒達はよ

く努力して多くの地域に関わる古典を見つけ来て来た。(その場所へ行き、写真を撮ったり図を書いたりしてまとめたものや、自分の家の古文書を提出したものもいた。)しかし彼らは地域にゆかりの古典を見つけ出し、それらの古典に、あるいは地域に親しみをもちはしたが、私には逆にそれらが今後の授業展開の限界として感じられるようになった。フィールドワークによる身近な古典の発見は、古典を自分自身の外部に位置づけることになりやすい。地名、言葉使用などの地域性に感じられる親しみは、それだけでは自分自身と重ねあわせていく古典文学の鑑賞へと直接つながってはいかない。私は生徒達の多くが探して来た「伊勢物語」を取りあげながら古典文学として読み進み、「帰っていく場所」という問題について考えていこうとした。在原業平は不可能な恋愛のなかでどんな場所を求めていったのか。続いて「史記」の項羽の最期を取りあげ、その最期の場所について考えていった。そして「浅茅が宿」へと進んでいった。

古典文学と自分自身とを重ねあわせるための材料として、「人間交差点」「トルソーの時代」「Hello Again」昔からある場所」などを使った。十代後半の生徒達である。「帰る」という言葉が単に逃げたり戻ったりする意味にならないよう、自分の根拠を求める意識の高まりにつながっていくよう願った。「Hello Again」昔からある場所」の歌詞の最後に「Hello again a feeling heart / Hello

again my old dear place」とある。自分自身と重ねることのできる古典がそうあつてほしいと願いつつ授業を進めていったのだが……。

指導の経過をあらかたまとめると以下のようなになる。

	学習内容	使用する主な教材	配当時間
1	「私達が帰っていく場所」の問題意識を持つ。	「道草」～人間交差点より～(原作 矢島正雄 作画 弘兼憲史)	1
2	1の問題意識を持ちながら古典を読む。	「伊勢物語」(四段 六段)「項王自刎」(史記)	5
3	「私達が帰っていく場所」の問題意識をさらに高める。	「トルソーの時代」(加藤典洋)「Hello Again」昔からある場所」(My Little Lover)	2
4	自分の問題意識に重ねて古典を読む。	「浅茅が宿」(雨月物語より 上田秋成)	4

#### 四 授業の実際Ⅰ——「トルソーの時代」「Hello Again」昔からある場所」——

内面を欠いた「身体」と身体を欠いた「内面」という「二つ」に引き裂かれた存在として私達は現代を生きざる

を得ないという「トルソーの時代」は、いささか生徒達には刺激的であったようだ。私は「ありうべき中心の復活という欲求」を「帰って行く場所を求める」と読みかえ、生徒達に自分自身の問題として「帰る」ということを考えさせようとした。自分の意志とは無関係に日常が過ぎていくイメージは、生徒達にはたいへん近いものであった。親との関係、日常生活についての疑問、友人問題など、多くの意見がこの授業では出されていった。この教材を最初に読ませたのが、北海道への修学旅行中という日常を見つめなおす機会であったのが影響したのかもしれない。

「Hello Again」昔からある場所へは、その時のベストヒットソングである。日常的なリズムにのせて「My old dear place」へ「帰る」とうたわれる。自分自身を見つめ、その根拠を求める意識を高めることと「帰る」ことを結びつけるものとしてはタイムリーなものとなった。授業でこのテープを流してから後、生徒達は日常のさまざまな場面を「帰る」という観点からとらえなおしやすくなるように思う。

## 五 授業の実際Ⅱ——「浅茅が宿」——

「浅茅が宿」を選んだのは、勝四郎が故郷へ帰ろうと考えた心情、宮木が勝四郎を待ち続けた心情を読み取っていくことを通して、彼らが何を求め、どこへ帰ろうとしたの

かを感じてほしいと考えたからである。勝四郎の言葉「いつまで生くべき命なるぞ」「信なき己が心なりける物を」が、また宮木の一途さが、生徒達に自分自身を見つめさせる契機となることを願った。

作品の力に後押しされて、生徒達はよく読んでいった。私は生徒達が作品に目を向け、深く鑑賞して発表したり書いたりしたことが、自然と「帰る」という問題に対する一つの考えにもなり得ていたことに気づかされていた。それは言葉をかえれば、知らないうちに与えられた問題を生徒達が自分のものとしてとりもどしていった過程であるとも言えるだろう。作品の舞台が葛飾の郡真間の郷で、いにしへの真間の手児奈と宮木が重ねて語られている。現代の生徒達がまたこれと同じように宮木と重ねて自分達を考える構造が、この物語にはあるように思われる。

以下に、授業展開の実際例（第三限）をあげる。

### 目標

- ① 七年後、勝四郎が故郷へ帰る気持ちになった心情を読みとらせる。
- ② 夫である勝四郎を待ち続けた宮木の生き方を読みとらせる。
- ③ 勝四郎、宮木の心情や生き方を自分の問題意識と重ねあわせる。

段階	導入 五分	展開 四十 分	整理 五分
学習活動	*物語全体の流れをつかむ。 *本時の学習の内容を知る。	*勝四郎が故郷へ帰る気持ちになったその心情を読みとる。 *夫を待ち続けた宮木の心情を歌を中心に読みとる。 *勝四郎の帰ろうとした気持ち、宮木の生き方を鑑賞する。	*勝四郎、宮木の「帰っていく場所」と自分自身とを次時では重ねていく。
指導上の留意点		*帰郷する気持ちになったきつかけが、かつて帰郷を思いとどまらせた原因であった戦乱であることに気づかせる。 *「人の心も今や一劫の尽るならん」「いつまで生くべき命なるぞ」「信なき己が心なりける物を」などの表現に着目させる。 *「人知らぬ恨みなるべし」「又よよと泣くを」の表現の持つ二重性に気づかせる。 *宮木の歌より、彼女の「恨み」に着目させる。	*自分自身の問題へとシフトできるだろうか。

## 六 「地つづき」の問題ととりもどすということ（展望にかえて）

「私達が帰っていく場所」と題した授業は、右へ左へと揺れながらいさか強引な展開となったのではないかと思う。私は生徒達と「帰っていく」授業をしなければならぬと考え、「帰る」という言葉だけを手がかりに進んでいった。しかしその「帰る」という言葉を再び実感できる言葉にさせていったのは、またしても作品の持つ力と生徒達の活動であった。生徒達は、私が展開しようとした「私達が帰っていく場所」とはほぼ無関係に作品を読み進み、その作品の力に動かされていった。しかし結果的には彼らは自分達にいちばんふさわしい形の問題のフォーム、自分自身を再発見していくフォームを身につけていくことになったようである。

授業を展開するなかで私は古典の鑑賞に重点を置き、地域の古典をなかば捨ててしまうような選択をした。古典を鑑賞していくことの方が、生徒自身の内面と関わらせやすいと考えたからである。それはそれで一つの方法であったとは思うのだが、「浅茅が宿」の授業の後、生徒達の力に押されて私は彼らが探して来た地域の古典をグループ発表させた。私はその後でようやく鑑賞以外の、「地域」から生徒自身の内面へのアプローチに手ごたえを感じることができたのである。

私が「帰っていく」授業をしたと考えたこと。それは日常の感覚と学習を地つづきのものとしてとらえ、生徒に提示したということなのだろう。そして授業が右へ左へと揺れながら進んでいったことは、それらが生徒達の日常と出会い、ぶつかりあつていったということである。なぜなら私と生徒達もまた地つづきのはずであり、学習を進めていくということは、一見切り離されているものの関係を地つづきのものとして再び自分達の手にとりもどしていく過程に他ならないと考えられるからである。全てを「地つづき」のものとして、自分達の手にとりもどしていかうこと——私と生徒達が出会っているのは、そんな過程の重なりの中ではないように現在の私には思える。

(大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎)

資料① グループ発表資料(1)

この資料は、グループ発表の準備資料として作成されたもので、縦書きの日本語で構成されています。右側には「療育の地」という見出しがあり、その下に「療育の地」に関する説明文が記されています。中央には、蝶のイラストが描かれています。左側には、生徒の意見や感想が記されたと思われる文章が複数見られます。また、下部には「十原 弘行」という署名や、発表の場に関する情報が記載されています。全体的に、教育的な活動の記録としてまとめられた資料のようです。

住吉天主の歴史

住吉天主の歴史

住吉天主の歴史
住吉天主は、住吉の地にあり、その歴史は古く、...



平中兼定と四郎兼光

平中兼定と四郎兼光
平中兼定は、平家朝臣の末裔で、...

和歌の神楽歌

和歌の神楽歌
和歌の神楽歌は、和歌の神楽の歌で、...

社屋建造の申立書

社屋建造の申立書
社屋建造の申立書は、社屋の建造を申請する書類で、...

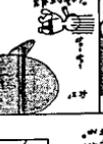


住吉の神楽
住吉の神楽は、住吉の地にあり、その歴史は古く、...

親子の親子



親子の親子

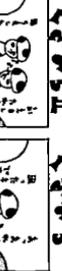


親子の親子

親子の親子
親子の親子は、親子の親子で、...

狂言の魅力

狂言の魅力
狂言の魅力は、狂言の魅力で、...



## 〈資料②〉 授業を通して生徒達が書いた文章

項羽にとって、江東は温かく自分を迎えてくれる場所ではあつたけれども、彼のプライドを満足させてくれる場所ではなかつた。戦局はかなり厳しくなつていたけれど、彼はその現実立に立ちまわることよりも逃げてきた自分でも受け入れてくれる故郷に帰つて王位に甘んじることを嫌つたのだ。在原業平とは対照的に現実逃避を恥じ、最後まで、「帰ら」なかつた彼の自尊心にはすごいものがあると思う。

(B組 女)

この授業を通していろいろな事を考えた。なんとなく口ずさんでいた「Hello Again」にも詩に重要な事が書かれていた。私が帰っていく場所はどこだろう？ 考えてみた時、やはり家である。母が居て、犬が居て、そして父が帰ってくる私達の家。もし、父も母も犬も居なかつたら、私は家には帰らないだろう。そして、気持ちの温かくなる場所を探し出すのであろう。今は、学校も家とは比べられない温かさをもっている。私の中では、友達が居てなやみを打ち明け、あるいはきいてあげ、青春、その一言では片づけられない、そんな場所がこの学校である。小山先生がおっしゃっていた「いろんな県、都市から、違う場所から、この学校へみんなは集まってきて、そしてまた夕方になれば、家へ帰っていく」という事の意味がわかつたような気がした。学校は一つのかえつていく場所ではないかと。

(C組 女)

私がつと年をとつて結婚し家庭を持つようになるかどうかと思ひました。今度は新しい家族の元へと帰るようになります。つまり私には二つの帰る場所ができます。でも、体はその二つの場所に帰ることができませんが、心は違うように思えます。自分一人で生きていけるようになれば体と心がだんだん離れるでしょう。心は本当に自分が求めている人の所へしか生きていけないはずです。体は毎日毎日自分の家族のもとへ帰つていても、それは私のぬけがらです。もちろん、私が夫を求めているならば、生活や世間体のためでなく、本当に求めているのなら、家族の所へと帰るのが一番ですが、私は業平の様に何か頼れる所を探し続けながら悶々と生きていくことしかできないでしょう。

(A組 女)

「私が帰っていく場所」それは、最も自分が素直でいられるところ。今の私にとってこの場所は二つある。一つは家。家族といふときの自分はとても自分に正直だと思ふ。もう一つは、好きな人の隣。好きな人の隣にいるときの私は飾らないと言わないけれど、ひねくれない。とても素直にまっすぐに物を見ることができる。最近(付き合ひだしてから)私は自分を再発見した。こんな自分が私の中にかつたのかと驚く。これは私が変わつたのではなく、彼が新しい私を引き出してくれたんだと思ふ。もし「昔からあつたものに今はじめて気づく」ことが「帰る」ということなのだとしたら「帰る場所」というのは結局自分の中にあるんじゃないだろうか。「帰りたい」と思うところが「帰る場所」なんだと思ふ、私は……。私が帰りたい

と思うところは私の好きな人たちのいるところ。それはいつまでもたつてもかわらない。私が彼らのことが好きで、彼らも私が好きである限り、そこには温かい空気が生まれる。その温かい空気の生まれるところへ私は帰る。

(D組 女)

安定した京での生活を捨てて、故郷へ帰った勝四郎。しかしそこで待っていたものは、愛した妻の死との強烈な形での対面だった。果たして、彼にとって「帰る」という選択は正解だったのだろうか。そのことについて考えてみたい。

これについて考えるとき、勝四郎が帰るに至ったいきさつを無視することはできない。彼は、人にすがるだけで何の社会的生産も行っていない自分に嫌気がさしていた。そして、もうこの世にはいないであろう妻に対しても、大きな罪悪感を抱いていたはずだ。そんな中、彼は「安定」を捨てた。

僕はこの彼の決断が誠実なものであったと評価したい。彼に戦乱の中での帰郷を強いるのは、あまりに酷だ。ではその誠実な判断は、彼にとって正解だったのだろうか。これについてはどちらとも言い難い。自分との格闘を毎日繰り返しながら、京に住み続けるのも辛いだろうが、彼の選んだ帰郷という選択も十分に厳しいものだったからだ。彼もそのことは知っていただろう。しかし彼は帰郷を選んだ。僕はそこに故郷の力を見出したい。最終的な決断を迫られたとき、打算的な要素を抜きにして、その人を引き寄せてしまう力、そんなものが故郷にはあるんじゃないだろうか。

(A組 男)

私は雨月物語を読む前と後とあまり考えは変わらなかった。でも一つだけ変わったことがある。それは、「必ずしも自分の好きな所へ戻ることが正しい選択ではない」ということが分かったことだ。例えば真間の手児奈の話について書くと、最終的に手児奈を選んだのは死ということだが、それは死にたくて死んだのではなく他の人々を傷つけないための手段で、これは自分の好きな所へ帰るということからは少しはずれると思う。同じ「死」ということで宮木の死について考えてみると、これは勝四郎を待つことが彼女にとって大切でその結果が偶然「死」だったというように思える。だから宮木の死というのは私の定義にあてはまる。

今回「私達が帰っていく場所」ということでいろいろな作品に出会ったが、すべてがいろんなことを考えさせてくれる材料になったので、とても有意義な授業だったと思う。

(A組 女)

この物語はただ一言「かわいそう」では片づけられないなにかがあります。

宮木は勝四郎を待つて待つて待ち続け、己の体が減びようとしていく時も魂だけはまだ待ち続けてしまうことが分かっていたと思います。また、待ち焦がれるあまりに勝四郎への愛が憎しみにかわることを忘れてもいたと思います。

だから勝四郎の前に一晩だけ姿を現したのはもちろん勝四郎への愛もありますが、己の魂を清め、安らかにするためであったのだと思います。この部分は「白玉か」に見られた日本の「鬼隠」につながるかんじがしました。

戦争という無意味なものに二人は引き離され、宮木は死へ、勝四郎は残された者のやり場のない哀しみに追いやられてしまふ様はさからうことのできない運命としか思えません。よよと宮木が泣く肩を何も知らない夫が「もう寝よう。」と抱く勝四郎の場面は言葉につまるあわれさがありました。

(D組 女)